

令和8年度 第1回 お互いさまのまちづくり協議会 議事録

日時

令和8年6月19日(金) 午前10時00分～11時30分

場所

豊橋市役所 東館3階 東 301 会議室

出席者

委員 12 名、長寿介護課(事務局)

議題

1. 令和8年度の委員について
2. 豊橋市お互いさまコーディネーターについて
3. 令和7年度 取組結果シートについて
4. ワークショップ「令和7年度の取り組みから見つける、これからのまちづくり」
5. 連絡事項(各団体からのイベント・講座等の紹介)

1. 令和8年度の委員について

〈事務局より説明〉

事務局より新任委員5名の紹介があり、各委員による挨拶が行われた。また、事務局側の体制変更について説明があった。

2. 豊橋市お互いさまコーディネーターについて

〈事務局より説明〉

支え合い活動団体に向けて配布した紹介チラシに基づき説明が行われた。

- 豊橋市お互いさまコーディネーターは、まちの居場所や助け合い活動を通じて、住民一人ひとりができることを持ち寄る地域づくり「お互いさまのまちづくり」の推進役である。
- 令和8年4月より新たに6名が就任し、既存のメンバーと合わせて計9名の新体制となった。

各コーディネーターの概要は以下のとおり。

- ① 元看護師。現在は多米でスナックバーを運営しながら、月1回朝市を開催。健康相談を受けるなど専門性を活かした、コミュニティナースと呼ぶべき活動者。
- ② 「鷹丘みどり会」という助け合い活動団体で、公園清掃をはじめとした地域の奉仕活動を中心に活動。生涯学習センターの館長でもあり、「本郷お互いさまの会」でセンターを拠点に困りごとを受け付け、助け合い活動に繋げている。

- ③ 元中学校教諭で、現在は大学で家庭科教育を専門とした講師。地域における「家族の在り方」などを研究し、お互いさまのまちづくりの理念に共感して就任。
 - ④ 長年、コーディネーターのアドバイザーとして協力していただいていたが、今年度よりコーディネーターとして活動。岩田校区を中心に活動し、地域づくりへの知識・経験が豊富。
 - ⑤ 子ども食堂「ふれあい食堂きりん堂」を運営。認知症カフェ「オレンジカフェきりん堂」など、高齢者も参加できる多世代の居場所づくりに幅広く取り組む。
 - ⑥ 子ども食堂「やまぐちさんちのハピネス食堂」を運営。高齢者の健康体操なども取り入れた多世代の居場所づくりを行い、学生との連携にも力を入れている。
 - ⑦ 南部圏域で複数の団体で活動する一方、新規団体の立ち上げ支援や居場所への見学などを積極的に行っている。
 - ⑧ NPO 法人の代表。「ごちゃまぜの世界」と題して多世代の交流を広げる活動を行う。元教員の経験を活かし、お互いさまのまちづくりに関する出前講座で講師を務めている。
 - ⑨ 民生委員。閉じこもりがちな高齢者の自宅に地域の住民を連れて訪問し、その方の自宅の縁側でお茶会を開くなどして、地域の支え合いの心を広げる活動を行っている。
- 様々なバックグラウンドを持つメンバーが加わったことで、多様な視点とネットワークがお互いさまのまちづくりに好循環を生みだすことが期待できる。
 - 令和7年度第3回協議会で助言者からあったとおり、新しいコーディネーターが地域で孤立せず力を発揮するためには、各団体の委員の力添えが重要である。地域の集まりやサロン、会議などにコーディネーターを招くなど、連携を深めていきたい。

3. 令和7年度 取組結果シートについて

〈事務局より報告〉

各団体から提出された令和7年度の実績をまとめた取組結果シートに基づき説明が行われた。

- 「第2期お互いさまのまちづくりアクションプラン」に基づき、令和3年度から8年度までの6年間で、支え合い活動団体を 55 団体創出することを目指している。
- 令和7年度は 14 の新たな支え合い活動団体が創出され、創出数の合計は令和6年度までと合わせて 53 団体となり、目標達成まであと2団体に迫っている。
- 事務局(豊橋市)の主な取り組みは次のとおり。
 - ・ お互いさまのまちづくりネットワークの登録団体数は、令和7年度に新たに8団体が加わり、合計 80 団体へ成長した。
 - ・ 豊橋創造大学や市立看護専門学校での出前講座を通じ、若い世代へのアプローチが進んだ。
 - ・ 市内各所の公民館等で開催したシニア向けスマホ教室では、延べ 57 人のシニア世代と 48 人の学生ボランティアが繋がり、多世代交流の場をつくることができた。
 - ・ 豊橋市お互いさまコーディネーター説明会を開催し、新たなコーディネーターの確保に至った。

〈主な意見〉

- ・ 団体数という指標は分かりやすく重要だが、市内の地域差が大きい。小学校区など歩いて通える範囲に居場所があるかが重要であり、市内の分布のマップ化が必要ではないか。
- ・ その地域における自治会の加入率と居場所・まちづくりには関係がある。自治会の所管課などを巻き込み、傾向を分析・把握すべきである。他課との連携が必要な時期に来ている。
- ・ 市街地は自治会加入率が高く、支え合い活動団体の数も多い。自治会と一丸となって地域づくりに取り組んでいく必要がある。高齢者だけでなく若い世代の自治会加入も重要である。
- ・ 高齢化と独居の進行により、今後も空き家が増えることが見込まれる。空き家の問題も含め、物事を俯瞰して見ていく必要がある。

4. ワークショップ「令和7年度の取り組みから見つける、これからのまちづくり」

〈内容〉

令和7年度第3回協議会で助言者から「報告を聞くための出席ではなく、主体的に参加して自由に話し合うことが大切」「課題からではなく、楽しさ・得意なこと・自発性を起点とした前向きなアプローチが有効」との助言を受けた。その実践として、令和7年度の振り返りと次の一歩について検討するワークショップを行った。

〈Aグループの主な意見〉

- ・ イベントの開催時にアンケートを取り、参加者のニーズを把握して次のイベントに反映している。どのような支援やサービスが必要かを情報収集し、各団体、何ができるかを考えて実践していくとよい。
- ・ ニーズと各団体の方向性を擦り合わせながら、様々な部署を巻き込んでいく必要がある。
- ・ 民生委員や自治会と繋がりたいと思ったら、とにかく声をかけ、行動に起こすことが大切。そのためには顔の見える信頼関係が必要であり、相手を巻き込んでいくことが重要。
- ・ 他団体の取り組みを先行事例として参考に、すぐに実行に移す。まずは真似てもよいので情報収集をして、やってみることが大事。
- ・ 支え合い活動団体がいない地域では、民生委員から地域住民へ声をかけて団体の立ち上げなどに取り組んでほしい。

〈Bグループの主な意見〉

- ・ 「認知症行方不明者声かけ訓練」は、小学生や民生委員、自治会、地域包括支援センターが参加し、校区一体となって開催されている良い取り組みであると感じた。また、子どものうちに、認知症や高齢者のことを知り、「ひとごと」から「自分ごと」になる良い機会であると感じた。
- ・ 地域包括支援センターの職員が地域や自治会に馴染める体制があるとよい。ある校区では、校区の防災訓練に地域包括支援センターの職員も参加しており、全校区でそのような体制があるとよい。
- ・ 高齢者が役割を持ち「ありがとう」と言ってもらえる場を提供することは、どんな団体でもできる取り組みであり、支え合い活動を普及推進するためにとっても重要な考え方である。

- ・ 若い世代を巻き込むことが重要である。イベントのチラシを 40 歳代の自治会加入者がAIを活用して短時間で作成するなど、若い力を借りることで効果的に取り組みを進めることが可能になる。
-

5. 連絡事項

〈各団体からのイベント・講座等のご紹介〉

- 今年度より、各団体が地域で開催するイベント・講座等を周知・共有する時間を会議後半に設けることとした。今回は、自治連合会のイベントチラシと、事務局の居場所づくり活動者交流会(7月10日開催予定)のチラシを配布した。
 - また、コーディネーターが所属する団体の活動概要をまとめた資料を配布した。生涯学習センターを拠点に事務局を置き、職員(会員)がセンターの電話で地域住民の困りごとを聞き、会員による支援へつなぐ活動を紹介した。
-

6. 今後の予定

次回(令和8年度第2回)のお互いさまのまちづくり協議会は、**令和8年11月17日(火)午前10時00分～11時30分**に開催予定である。今回出た意見を踏まえ、まずは庁内連携を図るとともに、協議会が持続性のある取り組みを継続して進めていくことを目指す。